

ひょうご 水百景

No.56 戸牧川・大磯川（豊岡市）

～「大磯の大曲り」は治水の神様・沖野忠雄の生誕地～



写真-1 ふれあい橋から大磯川下流方向を撮影（平成27年7月）

■ 「大磯の大曲り」を直線化して残った円山川の旧河道、改修前は・・・

改修前の円山川について、西垣勘次郎・元豊岡町長は、郷土誌『目で見える豊岡の廃川』の中の「豊岡廃川回顧談」で次のように記しています。

「豊岡は“ふんどし町”と申して細長く、京口から小田井までの円山川左岸沿い三十町（≒3.3km）近くの間には街ができました。～（中略）～宵田から中町、滋茂町（しもまち：現・豊岡市元町）へかけて川岸に玄武岩で五段程に築いた三百間（≒545m）ほどの“いと※1”には、毎朝早く天秤に桶をかついだ男や女が早い者勝ちに水汲みに集まって来て、飲料水や風呂用の水を家に運んでおりました。そこで洗濯もしておりました。しかし、衛生的には……（以下略）」とあり、衛生的ではないにしても、“川底の小砂までも透けて見える”“ほど水がきれいだったようです。

この郷土誌には、円山川大改修によって浸水被害が大幅に減ったことも書かれてはいますが、「船着場を兼ねた“いと”には洗濯物や野菜を洗う人が絶えず2～3人は居て、川筋はいつも賑やかだった」とか、「川面を帆掛け舟が材木や米俵等をたくさん積んで通っていた」、「所々にきれいな砂浜があって、よく水遊びなどして遊んだ」等々、円山川旧河道に関する懐かしい思い出話が多数寄せられています。

※1 いと：かつて円山川沿いの集落にあった船着場。玄武岩の石を積んで頑丈に造られたものもあったが、舟運の衰退により今ではほとんど姿を消している。



写真-2 大磯川上流の歩道橋から京口橋方向を望む

■ ショートカットにより廃川となり水の流入がなくなった円山川旧河道

円山川改修工事により「大磯（おおぞ）の大曲り」をショートカットしたことで、円山川旧河道は水の流入口を失います。その結果、川の水は停滞、衛生上好ましくない状態になってしまいました。そこで、昭和 7（1932）年に地方振興土木事業として豊岡町の直営工事が行われ、現・円山大橋左岸付近の堤防に通水樋門を設けるとともに、分断された旧河道を結ぶ“大磯運河”を開削しました。その運河には南から氏神橋、大磯橋、大栄橋、北橋の 4 橋が架けられました。

運河開削時の掘削土は、旧河道の一部埋め立てに流用して高水敷を造成するとともに、旧河道に沿って都市計画街路・大開塩津線（現・国道 312 号および主要地方道 3 号豊岡瀬戸線）が整備されました。

昭和 17（1942）年頃には、流水部を除く廃川敷約 14.5ha が、国から豊岡町に譲渡されました。

その後、時代の変遷とともに廃川は下水路化が進み、“川底が透けて見える”ほどきれいだった川の水質は悪化の一途をたどります。川の水は土色に濁り、夏になると淀んだ川の水からボウフラが湧いたとか。

そこで建設省（現・国土交通省）は、都市河川環境整備事業（昭和 44 年度に制度創設）による旧円山川浄化対策として、昭和 47（1972）年度から 5 ヶ年計画でポンプ方式による浄化用水の導入と汚泥 7,100m³の浚渫を実施しました。

旧河道部分は指定区間、つまりほとんど知事管理の世界ですが、そこで建設省自らが浄化事業を実施しています。河川法施行令第 2 条 7 項では、「指定区間外の一級河川の改良工事の施行に伴い必要を生じた河川工事で、当該改良工事と一体として施行する必要があるもの」は国が施行することとされています。当時の経緯は不明ですが、“大磯の大曲り”のショートカットにより旧河道への流入水が大幅に減少したことが水質悪化の大きな原因なので、その機能回復を原因者である建設省に行っていただいたということでしょうか。



図-1 円山川旧河道の状況

因みに、旧河道下流部は昭和 41（1966）年 4 月 1 日「戸牧川（とべらがわ）」として一級河川に指定され、右支川の大磯川は、まさに浄化事業実施のタイミングに合わせて昭和 47（1972）年 4 月 26 日一級河川指定されています。

なお現在、廃川敷には豊岡市民会館や豊岡健康福祉センター、豊岡市総合体育館、豊岡南中学校、豊岡市農協会館などが建てられています。



写真-3 戸牧川（立野橋から下流を望む）



写真-4 戸牧川と大磯川の合流点付近



写真-5 大磯川（戸牧川合流点上流）



写真-6 大磯運河（大磯橋から下流を望む）



写真-7 大磯運河（大磯橋から上流を望む）



写真-8 大磯川（国道312号京口橋から東を望む）

■ 豊岡市大磯は、“治水の神様” 沖野忠雄の生誕地

円山川の治水上のネックのひとつであった“大磯の大曲り”は、『日本の治水港湾工事の始祖』ともいわれる沖野忠雄の生誕地でもあります。

沖野は、安政元（1854）年に豊岡藩士・沖野春水の子として城崎郡大磯村（現・豊岡市大磯町）に生まれました。幼少の頃から俊才を認められ、明治 3（1870）年に藩の貢進生として大学南校（現・東京大学）に入学しフランス語による教育を受けます。

明治 9（1876）年パリの中央工科大学に留学、土木工学を学び明治 14（1881）年 5 月に帰国します。明治 16（1883）年内務省土木局技師となり、富士川、信濃川、庄川などの直轄事業を監督。明治 23（1890）年第四区（大阪）土木監督署長となりますが、大阪のみならず全国の主要な土木工事はほとんど沖野の裁断を仰いだといわれています。

在職 30 余年、一貫して河川・港湾工事に携わり、国外を含め手がけた港湾は 80 ヶ所、河川は 100 ヶ所を超え、なかでも、沖野が最も心血を注いだといわれるのが、工事責任者として関わった淀川の改修と大阪築港です。

常に新書籍を読んで世界の進運に後れぬよう努め、鉄筋コンクリートにいち早く着目、機械の導入などにも積極的に取り組み、『工事の機械化の元祖』とも言われています。

また、金銭や名誉に極めて淡泊で、大阪市が大阪築港の功労に多額の報奨金を贈ろうとしましたが、沖野は遂に受取りませんでした。

明治 44 (1911) 年内務技監に任じられ、大正 (1916) 5 年には第 2 代土木学会会長に就任するとともに、勲一等瑞宝章を受章します。

そして大正 7 (1918) 年に内務技監を退官、その際沖野は、「俺は技師として恥ずるところなきだけの仕事をしてきた」と親しい者に打ち明けています。

そのわずか 3 年後の大正 10 (1921) 年 3 月 26 日、神戸の自宅で 68 才の生涯を閉じました。人格高潔の士として歴代の大臣から厚く信頼され、多くの部下からも慕われたそうです。

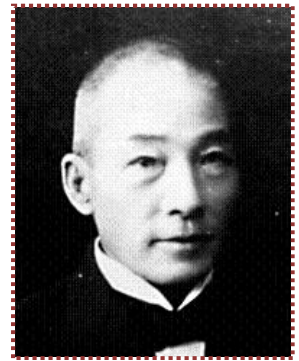


写真-9 沖野忠雄 (『海拓者たち
～日本海洋偉人列伝』から引用)

沖野の胸像が、淀川大堰の左岸部にある毛馬の閘門近くの広場ににあります。(写真-10) 沖野を慕う後輩が昭和 10 (1935) 年に建立したもので、胸像台座の前面には「工学博士沖野忠雄君之像」と刻まれています。台座に向かって左側面には「工学博士田邊朔郎^{※2}書」とあります。

胸像の右手には、太平洋戦争のため昭和 18 (1943) 年 2 月 3 日、胸像を海軍に献納したと刻まれた石碑があります(写真-10 参照)。永らく胸像のないままに時が過ぎましたが、石原藤次郎を委員長とする「博士の胸像再建委員会」が結成され、昭和 54 (1979) 年 11 月 10 日に胸像が再建されています。



写真-10 毛馬閘門近くに立つ沖野忠雄顕彰碑



写真-11 淀川大堰



写真-12 淀川大堰の左岸部に残る毛馬閘門

※ 2 田邊朔郎 (たなべ さくろう) : 文久元 (1861) 年、幕臣、田辺孫次郎の長男として江戸で生まれる。15 歳で工部大学校に入学、卒業論文で書き上げた「琵琶湖疏水工事の計画」が北垣国道・京都府知事の目に止まり、卒業と同時に京都府に奉職、弱冠 21 歳で琵琶湖疏水設計施工の最高責任者となる。明治 18 (1885) 年 6 月に起工式が行われる。難工事が予想された全長 2,436m の長等山トンネルでは、日本のトンネル工事としては初の竖坑を採用し、4 ヶ所から掘削することで工期の短縮を図る。厳しい湧水との戦いの末、工事は明治 23 (1890) 年に竣工するが、17 人の犠牲者が出た。朔郎は自費で犠牲者弔いの碑を建て、その碑に『一身殉事 萬戸霑恩(一身事に殉ずるは、萬戸恩に霑い)』と刻んでいる。

その後も各地の土木事業に関わり、黎明期にあった近代日本の礎を築いた。昭和 19 (1944) 年、82 年の生涯を閉じた。第 17 代土木学会会長。

■ 豊岡市大磯に「沖野忠雄先生生誕地」の碑

写真-13 は、戸牧川の右支川・大磯川（大磯運河）の左岸側にある「沖野忠雄先生生誕地」の碑です。

昭和 34（1959）年に豊岡市が建立したのですが、民家の庭先に立っているので少し奇異に感じます。県から豊岡市に派遣されている Y 技監の話によると、碑の敷地（玄武岩の石柱で囲まれた範囲）は豊岡市の所有地になっているそうです。

なお、昭和 60（1985）年 3 月、敷地の隅に建てられた木柱には、字がかなり薄くなっていますが、「治水之神様 工学博士 沖野忠雄先生 誕生之地」と記されています。



写真-13 「沖野忠雄先生生誕地」碑

■ 出石神社には沖野博士の顕彰碑

写真-16 は、豊岡市出石町宮内にある出石神社です。出石神社には、但馬開発の祖神とされている天日槍命※³（あめのひこのみこと）が祀られています。その参道の脇に高さ約 5m もある玄武岩の大きな顕彰碑が建っています。

顕彰碑は、昭和 34（1959）年 3 月に建立されたもので、碑の前面には「沖野忠雄先生」と刻まれ、背面には、「不世出の技聖」沖野の経歴や業績、人となりが記され、「（但馬開発の）祖神神域二碑ヲ建テ博士不滅ノ勲徳ヲ記念セントス」と刻まれています。

また、「沖野博士顕彰碑建設委員会」のメンバーの名も記されています。その中には、顧問として全国治水砂防協会専務理事・赤木正雄や建設省河川局長・山本三郎、そして神戸市長・原口忠次郎の名もあります。会長は、参議院議員の稲浦鹿蔵、委員には近畿地方建設局長・玉井正彰、兵庫県土木部長・近藤勇、豊岡市長・佐川辰夫、出石町長・金沢鋭二が名を連ねています。



写真-14 「沖野忠雄先生」碑



写真-15 出石神社への参道（撮影位置の右手が碑）

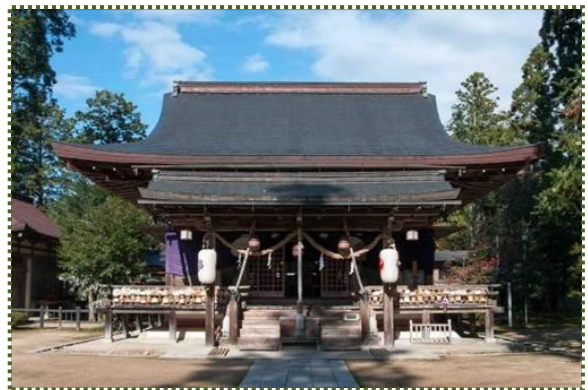


写真-16 出石神社

※3 天日槍命：朝鮮半島から日本に渡来してきた新羅の国の王子。出石神社由来記には、その当時入江湖であった但馬地方を、天日槍が瀬戸の岩戸を切り開いて濁流を日本海に流し耕地にしたと記されている。それゆえ、天日槍は但馬開発の祖神とされている。

■ 戸牧川右岸に立つ高浜虚子の句碑

戸牧川の右岸側、豊岡市民会館の北の土手に、昭和俳壇の大御所的存在だった高浜虚子の句碑が建てられています。（写真-17）

虚子の高弟であった京極杞陽※⁴ が戦時中豊岡に帰住され、氏を中心に俳句熱が高まってきたこともあって、昭和 20（1945）年 11 月、虚子が但馬來訪の際に、円山川旧河道の風情を詠んだ句です。

廃川に 何釣る人ぞ 秋の風

他に次のような句も詠まれています。

廃川の 橋の上行く 秋の人

高弟の京極杞陽が詠んだ句

廃川の 遠漣(とおさなみ)や 花芒(はなすき)



写真-17 堤防法面に建つ虚子の句碑

※4 京極杞陽：明治 41（1908）年、東京に生まれる。父・高義の家系は京極家のうち旧但馬豊岡藩主家の系統であり、杞陽は豊岡京極家 13 代当主。昭和 20（1945）年、父祖伝来の地である兵庫県豊岡町（現・豊岡市）に帰郷し、京極家歴代当主の屋敷・亀城館に住んだ。豊岡移住以降も、虚子の忠実な門人として師や同門の俳人達と行動を共にすることが多く、虚子が没するまでほぼ毎年、共に国内各地を旅して句作を行った。昭和 56（1981）年、心不全により 73 歳で死去。杞陽が生涯に作った句は、句集に収録されただけでも 9,996 句にのぼり、他の句会に残った句を含めると数倍になるといわれている。

■ モノローグ

写真-18 は、豊岡土木事務所において“特注”の大型図面筒に入れて保管されている「円山川・出石川平面図」です。

図面には、製図人として土木局係員の氏名が記されているので、大正初期に内務省土木局が作成した河川改修計画図と思われます。

近代的な工法により行われた円山川第一次改修の貴重な資料として、大切に後輩に引き継いでいかれることを願います。



写真-18 円山川・出石川平面図

【参考資料】

- 1 『豊岡市史・下巻』 豊岡市史編集委員会編 昭和 62 年 3 月
- 2 『目で見える豊岡の廃川』 豊岡市教育委員会編 昭和 46 年 6 月
- 3 『目で見える豊岡の明治 100 年史』 豊岡市教育委員会編 昭和 44 年 6 月
- 4 『海拓者たち～日本海洋偉人列伝～Vol.244』 日本埋立浚渫協会 平成 17 年 7 月
<https://www.umeshunkyo.or.jp/marinevoice21/kaitakusya/244/index.html>
- 5 『円山川風土記』 兵庫県但馬県民局 平成 19 年
- 6 『石原藤次郎、京極杞陽』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 28（2016）年 1 月 『ひょうご水百景』 No.56

改訂：令和 8（2026）年 5 月 『ひょうご水百景』 No.56